■　野外劇は万難を越えて　■

３年生の演し物のみで丸一日を費やす。たぶん全国的に見ても、こんな高校はそれほど多くはないだろう。舞台はグラウンド、観客は全校の生徒教職員と保護者。演じられる劇は、ひとクラス 25 分だが、10 クラスが演じ切るには、一日がかりになってしまう。

脚本はもちろんオリジナルだ。王道はハッピーエンド系だが、お笑い系や推理ものなど、多様で飽きない。考えさせるメッセージを残す工夫もあって、一日が短く感じた。

演劇は、総合芸術である。テーマを設定し、脚本を練り、配役を決める。背景画や大道具・小道具を作り上げ、衣装を揃え、音響で臨場感を出す。そして最後に、演技で劇に命を吹き込む。どうすれば楽しんでもらえるのか？　果たして作品に込められた思いは伝わるのか？　本番にたどり着くまでには多くの曲折があったはずである。

伝統は、半世紀以上も続く。かつて仮装行列から始まった屋外行事に、寸劇要素が加わって仮装大会へと名称を変え、いつしか野外劇と呼ばれるようになった。

６月頃、部活動を引退すると、受験勉強と平行してテーマやストーリーが練られ始める。本格的な準備は、記念祭前７日間と決められている。そうしないと過熱し、際限なく時間を費やすことになるからである。昭和 44(1969)年（当時の記念祭は 10 月 15 日前後）の校内新聞には、９月後半から準備が延々と続くことを案じた学校が、期間を１週間と定め、午後の授業をカットした、とある。３年生が野外劇にのめり込んでいくのも伝統のようだ。

講堂でのグランドフィナーレで、粋な演出があった。総合成績の発表の後、各クラスの総責任者が登壇し、謝意を語った。「みんながいたからここまでできたと思う。ありがとう」。万感の思いに落涙する者もいて、野外劇に懸けた思いに、３年生が一つになった。

彼らは、何のために演ずるのか、どうして劇に引き込まれていくのか。その答を知っている人がいるなら教えてほしい。だが、不思議なことに、演じ終えると同時に誰もが破顔する。苦労が一瞬で消え去り、どこからか達成感がこみ上げ、充実感に満たされていく。

コロナ禍での創立記念祭。野外劇の是非も検討された。しかし、私の中には、中止の選択肢はなかった。なぜなら、これほどまでに、生徒たちが主体的に考え、協働し、ぶつかり合いながらも、誰も取り残すことなく団結し、一つのカタチに作り上げていく行事は外にない。きっと、野外劇は万難を越えて、これからも当たり前のように続いていくだろう。何としてでもやり遂げたいと切望する生徒たちがいる限り。